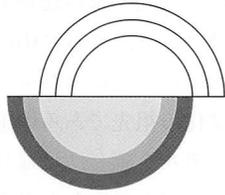


# ConcreteLife'09 : 2nd International RILEM Workshop on Concrete Durability and Service Life Planning参加報告

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/34674">http://hdl.handle.net/2297/34674</a>



# ConcreteLife'09 : 2nd International RILEM Workshop on Concrete Durability and Service Life Planning 参加報告

国際情報

五十嵐 心 一\*

## 1. 会議の概要

「コンクリートの耐久性と供用寿命策定」をテーマとした第2回 RILEM 国際ワークショップ Concrete Life '09 が、平成 21 年 9 月 7~9 日の 3 日間の日程で、イスラエル、ハイファ市にあるテクニオン—イスラエル工科大学にて開催された。本会議は、RILEM の最大行事として毎年 9 月に世界各地持ち回りで開催される RILEM ウィーク中の併催国際会議として開催され、会議の座長はテクニオンの Konstantin Kovler 博士が務められた。また、「ConcreteLife'06」と名付けられた本会議の第 1 回は 2006 年 3 月に、同じくイスラエルの死海のほとりのリゾート地エンボケックで開催されており、これに関してはコンクリート工学誌 2006 年 6 月号に新潟大学の佐伯先生が報告をなされている。

会議主催者の発表によると、参加国数は 33、投稿論文数は 73、参加登録者数は 100 人以上とのことで、そのうち日本からの参加者は表-1 のとおりである。RILEM ウィークは、ある特定テーマの国際会議に加え

て、各研究委員会 (TC) 会議や、RILEM の学会としての運営方針や将来の世界戦略などを話し合う複数の重要な定例会議の機会でもある。そして、最終日には学会表彰であるロバートエルミート賞 (今年の受賞者は、スイスの公的研究機関 EMPA の P. Lura 博士) の表彰式を兼ねたテクニカルデーをもって終了する。世界の著名な研究者が、それらの定例会議出席を主たる目的として参集しており、我が国からは、(独) 建築研究所伊藤理事、東京大学野口准教授の 2 名が出席しておられた。国際ワークショップ ConcreteLife'09 と RILEM ウィーク行事への日本からの参加者数は総勢 12 名であり、ホスト国のイスラエルを除き、国外参加者としてはドイツの 13 名に次ぐ参加者数であった。

開催地であるハイファは、エルサレム、テルアビブに次ぐイスラエル第 3 の都市であり、それらの都市から北へ車で 2 時間程度のところにあつて、イスラエルの地中海側の玄関として栄えた港町である。人口は約 27 万人であるが、周辺の町と一体化して約 50 万人都市圏を形成している。イスラエルにあつては比較的宗教色の薄い街であり、また会議開催期間が安息日に当たらないように組まれていたため、国外からの参加者にとっては、現地習慣にとまどうことなく会議に参加することができたものと思う。

表-1 日本からの参加者 (50 音順)

氏名	所属	参加区別	
		Concrete Life'09	RILEM Week
綾野 克紀	岡山大学	◎	
伊藤 弘	(独) 建築研究所	○	◎
今本 啓一	東京理科大学	◎	○
小早川鮎子	東北大学	◎	
佐伯 竜彦	新潟大学	◎	
佐々木謙二	新潟大学	◎	
佐藤 良一	広島大学	◎	
嶋 毅	住友大阪セメント	◎	
野口 貴文	東京大学	○	◎
Promentilla, M.A.B.	北海道大学	◎	
Phetkayson, A	広島大学	◎	
五十嵐心一	金沢大学	◎	○

(◎主参加, ○副出席)

## 2. 会議の内容

会議第 1 日開会式では、RILEM 会長であるテクニオンの Arnon Bentur 教授が開会の挨拶を述べ、続いてテクニオン副学長 Oled Shmueli 氏より歓迎の挨拶が述べられた (写真-1)。引き続き全体会議として「耐久性設計」と題したセッションへ移り、ベルギー、ゲント大学 Schutter 教授、および南アフリカ、ケープタウン大学の Alexander 教授より基調講演がなされた。その後、テクニオンの土木工学科内の 2 つの会場を使用して、パラレルセッション形式で個別の研究発表が行われた。

3 日間 2 会場の日程に対して、発表件数が 68 件と、比較的余裕のあるスケジュールであったため、すべての研究発表に対して 30 分もの時間が割り当てられ、我々

\* いがらし・しんいち / 金沢大学理工学域 教授 (正会員)



写真-1 開会式の様子（左から、Callec RILEM 事務局長、Bentur RILEM 会長、Shmueli テクニオン副学長、本会議座長 Kovler 博士）



写真-2 “特別講義”を終えて

表-2 講演セッションのタイトル一覧

	A 会場	B 会場
1 日目	養生	*ひび割れ
	鉄筋腐食	寒冷地環境
	*環境要因	*特殊コンクリート
2 日目	*ASR と硫酸塩侵食	構造物の挙動
	海洋構造物	温度の影響
	*物質移動現象	耐久性設計
3 日目	*微視的構造の変化	コンクリート技術と構造物の耐久性
	塩害	*体積変化
	構造物の耐久性と確率に基づく設計	



写真-3 Kovler 博士を囲んで

日本人にとってはいささか“キツイ”ものであった。講演プログラムのセッション名を表-2に示す。表中\*印は日本人参加者の研究発表が行われたセッションを示す。私自身は主たる研究テーマが異なるため、コンクリートの耐久性やライフサイクルマネジメントの勉強のつもりで、時差ぼけの頭を奮い起こしながら多くの講演を聴くように努めた。無論、すべての講演を理解できたわけではなく、以前に RILEM の同様なテーマの国際会議に参加した時からの研究の進展状況も把握できたわけではないが、私の中ではコンクリートのクリープや乾燥収縮のように、「コンクリートの耐久性設計は完全に定番の研究テーマになったな」というのが率直な印象であった。

会期中の講演のうち、最年少の発表者は東北大学大学院博士前期課程学生の小早川鮎子さんであったと思う。日本からの複数の“おじさん先生”が見守るなか、真摯に発表を行う姿が印象的であった。彼女の講演に対しては、スペイン科学研究高等会議（CSIC）の Carmen Andrade 博士より熱心な指導的コメントおよび質問がなされ、セッション終了後も、東京大学野口先生を交えて、ディスカッションが続けられた。最後には、「若いうちは失敗を恐れずに、研究発表を積極的に行ってくださいね」という励ましの言葉ももらい、カルメン先生と野口先生の特別講義は笑顔をもって終了となった（写真-2）。

大会 2 日目の晩には、Gala-dinner（夕食会）が、ハイファ市内ハダール地区（ダウNTOWN）にある科学技

術博物館中庭で開催された。ここは、旧テクニオン校舎を博物館として利用しているものであり、あのアインシュタイン（テクニオンと関係が深く、大学の後援会長も務めていた）が直接植樹した木が、今でもそのまま残っている。終始なごやかな雰囲気の中、中東のエスニック料理を堪能したひとときであった（写真-3）。

### 3. おわりに

私自身数年ぶりの RILEM 主催会議の参加で、旧交を温めることができ、またかつて留学していた地であるので、街並みそのものが、怖さ知らずで飛び込んでいったあの頃を思い出させ、懐かしさでいっぱいの会議であった。RILEM の運営に関わる日本代表委員の伊藤氏によると、日本は会員数で第 3 位を占め、RILEM の行事や委員会への積極的な貢献が期待されているとのことである。RILEM はヨーロッパを中心にしながらも、確実に世界を、そして手薄だったアジアを見据えた展開を図っているようである。RILEM 主催の会議は会員でなくとも参加でき、また、RILEM ウィークは、2010 年はドイツ、アーヘン、2011 年香港、2012 年南アフリカ、ケープタウンにて開催が決まっている。アーヘンでの会議テーマは既に発表され、アブストラクトの募集も始まっている。本号がお手元に届くころは、アーヘンには間に合わないだろうが、香港やケープタウンには間に合う。香港グルメもアフリカサファリツアーも楽しそうである。是非とも RILEM のウェブサイトを皆様のお気に入り登録のうえ、RILEM の日ごろの活動に興味を持っていただいて、日本からの参加者が益々増えることを期待して本報告を終えようと思う。